

彼我的自然観と日本の田園

昭和40年代半ばから山岳雑誌『岳人』の表紙を描いていた辻まことは、アナキスト辻潤の息子で、ヒマラヤを頂点とするアルピニストやヒマラヤニストをもじって「ウラヤマニスト」という言葉を造語し自称したナチュラルリストでもあった。その稀有な出自からか、深みのある画文エッセーをものにし、マニアックな読者を魅了していた。日本の山々といえは単なるスポーツの対象というよりも静的な自然の哲学に誘う高貴な山岳文学というジャンルと系譜があった。それらは森など自然とともにある野外活動、今でいうアウトドアライフの精神的バックボーンで、崇高な憧れの源泉近くにあった。

米国人は自然の中で単独で生活することに特別な思いを抱く。ヘンリー・デービッド・ソローもその一人であり、ボストン近郊の湖のほとりで森の生活を始め、自作の小さなログハウスでの2年2カ月の自給自足の暮らしを綴った『森の生活～ウォールデン～』は、米国の古典文学の一つとされる。『独りだけのウィルダネス』（リチャード・プローンネク著）は、アラスカの森の生活16カ月の記録であり、荒々しい自然と戦い抜いた50歳の男は英雄として迎えられた。そしてこの本はアウトドアマンのバイブルだと讃えられた。

京都の山里に庵を結んだ鴨長明はソローのはるか先人にみえるが、日本人の多くがなじんできた自然と言えはいわゆる田園や里山であり、江戸や京都などの都市で鑑賞眼を養った都市民が近郊へ活動範囲を広げ、田園に新たな意味づけをした。手入れされた田園の風景と見る側のまなざしの出会いであった。辻まことが描いたウラヤマニストのフィールドも都市から奥山に向かう途中のグラデーションの中にあり、彼はそこにやさしく知恵に満ちたウラヤマの醍醐味を見出していた。

風土と地方創生

北海道は国立公園の中に町があるとも言われ、このような地方に住むのも本州では得難い醍醐味といえそうだが、田園回帰がブームだなどと言われてきた一方

地方に住む意味と動機

（田園の風土と産土考）



草苺 健 (くさかり たけし)
雑木林&庭づくり研究室・主宰

地方は薪ストーブの暮らしがいつでも可能だ

で、一向に東京集中や大都市志向は衰えないようだ。平成も後半になって地方創生という施策がとられ、地方は悲喜こもごもの対応に追われたが、少子化、高齢化、働き口の創出などの課題は、これまでも自治体個々が熟慮してきた対応をリメイクすることでしかなかった。地方に人を呼ぶ観光もかつてよりもはるかに注目されることになったが、地域資源と広報効果はおのずと限界がある。そんな中で確実に成果を上げてきたのは地域おこし協力隊による若者誘致である。

地方に人が来るための大事な要件には都市的利便や働き口がある。都市的利便はITなどである程度引き込むことができるが、協力隊を地方に呼ぶきっかけは施策による公募だった。採用されて生まれた地縁がもとで、隊員の定住率は60%を超えているという。まずは地縁に頼って居住する間に地域との関係が生まれ、人を含む風土が受け入れられてくるのではないかと思う。NHKの朝ドラ『なつぞら』では、東京という大都会と、地方のマチやコミュニティ、そして家族、さらにそれらを包む十勝の風景という4つの大きなステージがあったが、その4番目に見え隠れしていたのが十勝のイメージ=風土だった。風土はゆりかごであるが時に人を旅立たせ、また呼び戻し受け入れる。人にとって生まれ育った土地は何物にも代えがたいが、北海道は縁さえあればよそ者をも容易に受け入れてきた。

土地が発する^{うぶすな}産土の声

小さなデコポン畑で生計を立てている熊本の友人が、ある日いつもの仕事をしていると、目に見えない何か大きなものに包まれ、この土地で働いていられることの幸福感が突如として湧いてとても有難い気分になったと言う。わたしも若い頃に勇払原野で似た神秘体験があったので大いに共感することができた。イザベラ・バードは明治初期にこの勇払原野を訪れ、荒れ果ててうら寂しい地の果てのようだと『日本奥地紀行』で評したが、実は「もう一度来たい」とも書いている。山と森と原野の単純な構成の風景が実は地元神社の祀る三神そのものであり、何もないように見える風土がバードの「心をひどく魅了した」のである。



人には様々な幸せがある。試験の合格だったり、就職や結婚や子どもの誕生だったりするが、土地のなにか偉大なもの=「産土」とともにいること、つながっている感覚がそれらに優るとも劣らない幸せや喜びであるということに、熊本のエピソードを契機にして改めて思い至った。滅多にやってくる体験ではないが、愚直に日々の仕事に打ち込んで地域の花鳥風月や人と向き合っているときに、突然向こうからやってくる。時にやってきても気づかず言語化することがないこともあるだろう、そんな不可思議さを含む領域でもある。

地方にある^{まな}自贖い生活の手応えと産土

ウラヤマニスト辻まことやソロー、鴨長明を連想して身近に頭に浮かぶのはアウトドア作家の田淵義雄氏である。氏は2003年8月の本誌に『アウトドアライフは終わらない、そして、北海道に求めるもの』を寄稿し、その中で、北海道は今も憧れの地であること、長野の山里にはりつくように暮らすのが幸せであり小さな家と薪ストーブ…いい自然とフライフィッシングを楽しめる流れがあればどこでも楽しく暮らしていくことができる、と書いた。国木田独歩が『武蔵野』で驚きを綴ったように、風土へのまなざしがあれば日本国中、地方はどこも住むに値するのである。それどころか、そこで今を生きることで世界は始まり、それで実は十分なんだと思えるようになった。畑や薪ストーブが象徴する暮らしの手応えは、産土とともにいる田園や里山の幸せと同義だと知ったのである。

1951年山形市生まれ。75年北大農学部卒。76年、苫小牧東部開発㈱に入社し、苫東工業基地の緑地保全管理、景観形成、広報に従事。98年、(財)北海道開発協会に入社。はまなす財団への出向を経て2015年6月から開発調査総合研究所理事・所長、19年6月末所長を退任。HPで「雑木林&庭づくり研究室」を主宰。苫東・勇払原野の保全と利活用を担う苫東環境 commons を設立し、2010年1月、NPO法人認証。技術士(環境部門)。著書:『林とこころ』(2004 北海道林業改良普及協会)、『生活見なおし型観光とブランド形成』(共著、2007 (財)北海道開発協会)、『commons 地域の再生と創造~北からの共生の思想~』(共著、2014 北大出版会)、『ハスカップとわたし』(編著、2019 中西出版㈱)、ほか。